

## 1. 水俣を読む

昨年から、石牟礼道子さんの作品を読み返しています。「苦界浄土」、「天の魚」を読み終え、今「流民の都」を読んでいるところです。

石牟礼さんの文章は、美しすぎるほど美しく、また限りないやさしさに満ちています。実をいうと、30年以上前に読んだときには、水俣弁の美しさがわからず、読み進めるも、つかえ、つかえという状態でした。その後、砂田昭さんのお芝居を観たり、土本さんの映画を観たりしているうちに、水俣弁独特の美しさを味わえるようになりました。

もちろん、石牟礼さんの書かれていることは、美しさ、やさしさだけではありません。石牟礼さんの言う日本近代下層民の怒りや哀しみ、下層民を虫けらのように扱う権力、大企業や行政、政府への彼女の激しい怒りもまた、もちろん描かれています。

「天の魚」は、1972年から73年にかけての、水俣自主闘争の詳細な記録ともいえるべき本ですが、川本輝夫さんをはじめとする水俣病患者の、群像劇のような趣もあります。そこでのチッソとのやり取りは、緊迫感あふれる内容です。久我氏（当時チッソ専務）が、川本さんや佐藤武春さんとこたつに入って、何とか「言い値」で手を打とうと躍起になっている光景が描かれていたりもしています。最近になって、その久我氏（この時は副社長）に、当時の官房副長官が、「川本など逮捕すべきだ」と語ったという記事が出ていました（朝日新聞2017年1月8日）。患者を救済するのだ、という振る舞いをして、いかにも善人を装っている、チッソ、国、県、市民の偽善が、この記事によってまたもや暴かれた、というべきでしょうか。

石牟礼さんの思いは、水俣から、三里塚、足尾、長崎へと広がっていきます。また、水俣漁民から、かんじんさん（非人さん）、強制連行された朝鮮の人々と、これも私たちが見ようとしない、あえて目をつぶってやり過ごそうとしている人たちをも、その中に含みこんで、文章を紡ぎだします。そんな中で、知っているようでいて、結局私自身、上の空だった事実を突きつけられました。大日本帝国の朝鮮侵略のことです。

## 2. 「慰安婦像」

韓国で、慰安婦像のことが大きな問題になっています。多分、日本国内では、多くの人が、外交的に決着した問題を、なぜまた蒸し返すのか、といった意見が大半でしょう。さらに、「韓国の民度が低いからこんなことになるのだ」、とか、下手をすると、「韓国人はエキセントリックだから困る、交渉にならない、国際的な常識が通じない国、国民だ」、などと、ほとんどヘイトスピーチまがいの議論が出てくるのが想像されます。正直に言えば、私自身が、この問題で、心の奥底に「像にこだわるのはなぜかなあ」などという、黒々とした声を聞いてもいたのです。

少し長くなりますが、石牟礼さんの本から引用します。

「大韓民国居留民団中央総本部代議員長崎県日韓親善協会常任理事安洪賛（あんこうさん）氏の声。

何かこう、匂いがする、匂いでわかるんだ。日本人のすることは。

誠孝院に骨がある。名前も出身地もわからないのである。わからないのですよ。その他の大部分が。奥の方が。

何百人何千人何万人の人間がどこからひっぱってこられてどこにやられてどこでどういう風に死んだかわからない。死んだ人間にきいてみることは。

日本人が募金運動をやったりしているのも知っていますよ。

金で片づけようとするわけですな。すぐいつも、むかしから、安い金で。

わが国の農業総面積の80パーセントは日本がとりあげとったのですよ。東洋殖産などというのがあって。総督府と一番結託しとった日本資本が、あなたのところの水俣の日本窒素の野口コンチェルン。

土地をとられれば百姓はどこにゆきますか。土地を奪っておいて、人を奪った、日本は。とった人間は関東大震災で殺し、大東亜戦争で殺し、炭鉱で殺し、原爆で殺した。

誠孝院の骨の納骨堂をたてるちゅうて募金活動をやりおる人たちのことは知っています。あの善意というやつ。何か匂いがする。いくら意識の高い人たちでもそんな発想法だ。そんな事では片づかない。ぼくら乞食じゃなかとですけどん、そんな風な、日本風の情け、発想法は、ぼくらには合わんとですよ。

むかしから、安か金で、日本人は片付けてきた。日本人が片付けて来た分はぼくらの方にはそっくり片づかずに残とる。これをどうしたらいいかー。ぼくら自身の傷を。そんなことではわかりあえない。」（流民の都 136 ページ）

厳しい言葉です。私たちが忘れて、忘れたふりをしている戦前の日本の、朝鮮人民への仕打ち、ここをきちんと見据えなければ、和解も何もありません。それがたとえ30%であろうと、20%であろうと、その数字はどうでもいいのです。日本が強制的に奪った、という事実だけが問題です。そこに暮らしていた人々はどうなったのでしょうか。土地を奪われた農民、働くところを奪われた農民は、普通に考えれば、貧困化し、生活は困窮を極めたでしょう。安洪賛氏が言うように、日本に強制連行されたのかもしれない。日本の一部の人はそれを、彼らが自発的に来たのだ、などと言います。しかし、それ以外に生きる道がなかったと考えるのが自然です。そうした歴史的事実に、目をつむり、口をふさいで、今私たちは、韓国の人々と和解しようとしています。

そうした積年の日本に対する恨み、怒りを私達が知り、理解し、そのうえで幾重にも謝罪しないかぎり、友好関係などとても築けるものではないのです。韓国の人々が「少女像」を撤去させないと思う気持ちは、当然です。私は、大日本帝国が朝鮮半島や中国大陸（満州）で行った侵略行為をあまりに知らなすぎました。アジアの諸国での残虐行為を知らなすぎました。戦争は本来残虐なものだ、だから、やむを得なかつたし許されることだ、帝

国主義は一つの時代過程でしかない、今は違う時代だ、といった理屈を私は拒否します。だからこそ、戦争廃絶を考えなければならない、人種差別や性的差別をしてはいけない、と発想すべきなのです。昔、光文社のクッパブックスに「三光」という本があったのですが、あまりに恐ろしくて読むことができませんでした。直視できなかつたわけです。その感覚を、今でも大切にしたいと考えています。しかし、恐ろしくても、見なければならぬことはあるのでしょう。知ること、理解すること、その前提は目をつむらないことなのでしょう。

石牟礼さんの本を読んで、江津野柰太郎さんへの「柰よい、堪忍せろ。堪忍してくれい。／じじもばばも、はよから片足は棺にさしこんどるばってん、どげんしても、あきらめて、あの世にゆく気にならんとじゃ。どげんしたろばよかろかね、柰よい。」(苦界浄土 P172)という爺さまの言葉に、言葉を失います。それでも、石牟礼さんの言葉を誰かに伝えたくて、こんな拙い文章を書いてしまいました。最後までお読みいただき有難うございます。